

- 日時 平成30年7月13日(金) 13:30～17:00
- 場所 美濃市防災中央コミュニティセンター 2階大会議室
- 出席者 岐阜県教科用図書美濃地区採択協議会委員20名 事務局1名

【司会】

平成31年度より新たに採択します中学校の「特別の教科 道徳」の教科用図書について協議を始めます。これより調査研究の結果について答申をしていただきます。それではお願い致します。

【答申者】

美濃中学校の山田尚人です。今回、「特別の教科道徳」の調査研究を行ったのは、8者です。最初に8者の教科書の特徴について、説明いたします。

①東京書籍についてです。

生徒の日常に近い題材から、現代的な課題を題材として、人の力強い生き方や自然に対する畏敬の念を抱かせるよう、心に深く訴えかける良質な教材が多く、主体的に考え、対話を通して深く考えられるよう、主に2つの問いで学習活動が構成されていることが特徴です。

②学校図書についてです。

「大切にしたい四つのつながり」として「命」「人・社会」「世界・文化」「自然」に焦点を当て、題材構成をおこなっています。教材には「学びに向かうために」として問いが3つから4つ盛り込まれ、道徳的価値の補完のための「心の扉」が位置づけられています。

③教育出版についてです。

「考え、議論する道徳」の授業をめざして、学習の流れとポイントを分かりやすくするために、「学びの道しるべ」として、主に3つの問いで学習の流れを示しています。今日的課題を題材とした教材がバランス良く配置され、学びを深める工夫がなされています。

④光村図書についてです。

学習の流れをつかみやすくするために、各教材に「学びのテーマ」という手引きが示されています。また、生徒が多様な考えをもつために4つから5つの「考える観点」が位置づけられており、主体的・対話的な学びを深める工夫がなされています。

⑤日本文教出版についてです。

良質な教材が多く、対話的で深い学びができるよう「3つのステップ」で学習の流れが明示されています。そして、終末において学んだことを自分なりに生かす「自分に+1」の問いにより、道徳的実践力を養おうとする意図が明確です。また「いじめ」と向き合うユニット学習には多くの題材が関連付けられおり、いじめの未然防止に対する工夫がなされています。

⑥学研についてです。

生徒の問題意識を引き出し、多面的多角的に考えるために、教材には主題名を提示せず主に1

つの問いで展開を構成しています。特設ページにおいて、役割演技を取り入れ、全学年で体験的に学びを深める工夫がなされています。

⑦廣濟堂あかつきについてです。

全学年「本冊」「別冊」に分かれており、書くこと・話すことなどの言語活動の充実を図っています。また別冊は、内容項目順に構成されており、道徳的価値の理解を確かなものにしようとする工夫がなされています。

⑧日本教科書についてです。

考え、議論する授業を生み出すため、「考え、話し合ってみよう」との見出しにより、主に2つの問いで、学習の流れを示しています。また、全学年において、相手の立場に立って考えるワークシート活動を取り入れています。

中学校「特別の教科道徳」、学習指導要領の趣旨や美濃地区の実態などに基づき、これから述べる観点で調査研究を行ってまいりました。

小学校に続き、中学校でも「特別の教科 道徳」として教科化になります。この背景には、「いじめ」による悲しい現実が後を絶たないこと、そして、「いじめ」をなくすために道徳教育が担う役割が大きいということがあります。

そこで、このような道徳の教科化にかかわる趣旨と、先日の教科書展示会でいただいた意見を踏まえて次の3点について観点をもち、調査研究を行いました。

1点目は「いじめ問題に重点をおき、「いじめ」について主体的・客観的に考えることができる教材の構成や質となっているか。」ということです。

美濃地区の各中学校では、これまでも「いじめ」は許さないという指導を行ってきています。しかし、他者を思いやる温かい人間関係を創ることのよさは分かっていますが、いろいろな場面でその正しさを貫ける生き方かどうかを問われるとまだまだ弱さがあるのが実態です。そこで、道徳科では、生徒自身が自分たちの問題として教材などを通し、主体的・客観的に「いじめ」について考え、いじめを許さない生き方に向き合えることが大切であると考えます。

2点目は「郷土に誇りと愛着をもつ心の育成ができる教材をとりあげているか。」ということです。

これからの社会を担う子どもたちが、ふるさとを愛し、ふるさとに誇りをもち、ふるさとの文化や自然を大切に受け継ぎ発展させることは、美濃地区の課題です。自分たちのふるさとに思いを馳せられる教材かどうかを調査研究しました。

3点目は「仲間と共に考え、議論することを通して、多様な見方・考え方に触れ、自己の生き方を見つめることができる教材であるか。」ということです。

学習では、「主体的、対話的で深い学び」という言葉が重要なキーワードになっています。これを道徳科において考えると「考え、議論する道徳」ということになると捉えています。「考え」とは、「主体的な学び」です。教材を通して自分の考え方や感じ方を明らかにし、表出するということです。そして、その考えをもとに「議論する」こととなります。道徳科における議論とは、多様な考え方や感じ方に出会い、交流するということです。このような「対話的な学び」を通して、自分の考え方や感じ方を明確にすることで「深い学び」につながります。「考え、議論する」ことが、それぞれの意見を戦わせるのではなく、多様な見方や考え方を通して自己を見つめることができる教材であるかを調査研究をしました。

以上3つの観点から、8者のうち「東京書籍」と「日本文教出版」の2者の教科書は、良質な教材が多く収められており、多様な価値観をもって考え、議論することができる教材が多く、美濃地区の中学校に適

しているものであると考え、この2者の教科書を詳細に調査研究いたしました。これより、3つの観点に沿って、2者について詳しく説明いたします。

1点目の「いじめ問題に重点をおき、主体的・客観的に「いじめ」について考えることができる教材を取り上げているか。」について、説明いたします。

両者とも、いじめに関して客観的に理解が図られるような導入教材が用いられております。

東京書籍では、「いじめのない世界へ(1)」で「いじめに当たるのはどれだろう」という絵を用いながら、学校生活の具体的な場面を想定して、生徒自身に考えさせようとしています。文章から読み取ることが苦手な生徒にとって、絵を活用した教材はイメージ化しやすく思考を促すことができると考えます。

日本文教出版では、プラットフォームとして『「いじめ」って何?』や「怒りの感情と上手に付き合おう」として、いじめが起こる背景や自他の関係性について図説を活用して、同じように分かりやすく紹介しています。昨今のいじめに関する問題について、生徒はいじめと分かっておらず関わっているケースや背景の理解が不十分なことも少なくありません。長期化、複雑化する要因はここにもあります。そのような生徒に対して、具体的な場面を想定した図や絵などの例示を通して、客観的に自分を見つめさせるような場の設定は大変良いと考えます。

さらに、日本文教出版では、ユニット全体で中心教材とのつながりがよく考えられており、いじめについて一つの知識として学んだことを教材の中で活かして考えることができるよう、系統性のある教材の配置を工夫しています。1年生の5・6月のユニットでは、だれもが知っているさかなクンの実体験をもとにした教材を扱っており、いじめられた子にそっと寄り添う生き方に共感もてる内容となっています。生徒にとって親しみやすい導入となり、いじめのない世界をつくるための導入として適切であると考えます。

次に扱われるのは、「近くにいた友」という教材です。役割演技という手法を用いながら、主体的な見方と客観的な見方の両面から友情・信頼に関わる生徒一人一人の考えに深まりをもたせようとしています。

ユニットの最後には、「トマトとメロン」という教材を用いています。やや抽象的な内容ですが、ユニット全体がいじめとどのように向き合っていくかという流れの中で、一人一人の良さを認め伸ばすことの大切さについて考えられるような出口の設定となっています。このようなユニットの配置によって、道徳的な価値を高められるような教材の構成となっています。

次にいじめに関わる資料の質について説明いたします。

東京書籍では、いじめはふとしたきっかけから始まる場合もあれば、特に理由のない人物が対象となって始まる場合もあるが、どちらにしてもいじめは絶対に許されないことであるということを強く訴えています。

日本文教出版では、いじめは特別ではなく身近に潜んでいることを内容とする題材をいくつも取り上げ、一人一人の個性を尊重することがいじめの根絶につながることを考えさせようとしています。

生徒が自分との関わりにおいていじめ問題を捉えることや、問題解決に向けての実践的な態度を育てるという点において、より良質な教材となっております。

次に生命尊重の取り扱いについて説明いたします。

東京書籍の2年生「奇跡の一週間」では、ホスピスのボランティアである主人公が、がんの末期患者との出会いを通して「どのように生きるか」を考える内容となっております。

日本文教出版の2年生「命を見つめて－猿渡瞳さんの六百四十六日－」では、骨肉腫患者である登場人物の病状を細かく追いながら生きる素晴らしさを投げかける内容となっております。

どちらも一生懸命に生きることについて書かれたものですが、東京書籍の教材は残り少ない命の中での生き方を取り上げており、日本文教出版の教材は生きることを最後まで諦めなかったことを取り上げています。また、日本文教出版の教材では、病状についても詳しく書いてある点から、生徒の心に命の尊さ

や生きることの素晴らしさを訴える力のある感動的な教材となっております。

2点目の「郷土に誇りと愛着をもつ心の育成ができる教材をとりあげているか。」について説明いたします。最初に両者で取り上げられている郷土の偉人、杉原千畝についての教材を比較説明いたします。

東京書籍では2年生に「六千人の命のビザ」と題して位置づけています。地理関係と当時の情勢が理解しやすいように大きな地図や人々の写真が掲載されています。また丁寧な記述と、多くの写真資料や挿絵・年表もあり、身近な存在として、杉原さんの生き方を考えることができるよう構成されています。

日本文教出版では、3年生に「命のトランジットビザ」と題して位置づけています。わかりやすい文章記述により、生徒は容易に内容理解ができると考えます。「生命の尊重・人類愛・国際理解」といった多様な価値に関して、杉原さんの生き方から多面的・多角的に考え、交流することができ、自分を見つめることができる良い教材であると考えます。

次に、郷土の伝統文化や地域性に関わる教材について説明いたします。

美濃地区においては、人口減少・少子高齢化・若者の地元離れなど、地域とのつながりが薄れていくことが課題となっています。身近な郷土教材によって、実感をもって郷土を愛する心を育むことは、まさにこの地域の喫緊の課題ともいえます。

東京書籍では、3年間で4つの教材が扱われています。

1年生の「ぼくのふるさと」は岐阜県恵那市串原の中山太鼓を題材として扱っており、伝統芸能を受け継ぎ守っていききたいという登場人物を、身近に感じることができると考えます。また、2年生の「夏祭りの夜」では、秋田の竿燈祭りが題材として取り上げられ、郷土の魅力を知り、郷土の誇りを見出す展開となっています。

日本文教出版では、3年間で3つの教材が扱われています。

1年生の「ふれあい直売所」では、無人野菜直売所が取り上げられ、美濃地区の生徒たちも身近に感じることができ、地域社会での自分のかかわり方を考えることができます。

2年生の「和樹の夏祭り」では、どの地域においても受け継がれている夏祭りを題材として取り上げており、美濃地区の生徒たちは、それぞれの郷土において守り受け継がれている「郡上おどり」「美濃祭り」「関まつり」と関連づけて、自身の経験も交えながら、より深い考えを交流することができると考えます。さらに、参考として「受け継がれる文化『郡上おどり』」が取り上げられており、身近な地域素材として、より実感のこもった議論ができると考えます。美濃地区と関係のある題材が取り上げられていることが日本文教出版の特徴です。

3点目の「仲間と共に考え、議論することを通して、多様な見方・考え方に触れ、自己の生き方を見つめることができる教材であるか。」について説明いたします。

東京書籍では、2時間扱いの中で問題解決的な学習や体験的な学習ができるよう工夫されています。1年生の「席替え」で具体的に説明します。席を決めることをくじ引きで行った結果、勝手に席をかわることは認められていないにも関わらず席をかえてしまうという問題が起きました。そこで主人公である私は、不愉快な思いをする人がいないように、もう一度席替えのやり直しの提案をしました。「みんなで話し合ってみるために決めたことを、どうして守ろうとしないのだろう。」という一文で話が終わっています。このように主人公が問題を提起することで、問題解決的な学習を図ることができるようになっています。問題を解決していく手段として「アクション」があり、そこでは役割演技による体験的な学習ができる工夫がされています。登場人物の4人のそれぞれの立場を交代で演じることで、立場の違う感じ方や考え方に気づくことができます。さらに、感じたことをもとに全体で話し合う活動により正しい判断をするためにはどうすればよいのかを考え、教材のもつ本質的な価値に迫ることをねらっています。

日本文教出版では、問題解決的に話し合う学習や役割演技等を通して体験的に学ぶ時間を重点として計画しています。日本文教出版の特徴は、道徳的価値を教材の中に示して、問いによってその価値に生徒を導くのではなく、悩み、葛藤する場面を取り上げ、考え議論する中で生徒自ら道徳的価値に気づいていくという授業を構成している点です。

このことを1年生の「公平と不公平」という教材で、説明させていただきます。「お年玉をもらう時、姉と自分の金額が違うのはあってもよい違いなのか。」「コンサートの列に並んでいる時、車いすの方が優先的に会場に入るとはあってもよい違いなのか。」という日常の中にある違いについて考える教材です。問題についてグループで考え議論した上で、「あってはならない違いは、どのようにすれば解決していけるか、自分の考えをまとめよう」という発問によって公平、不公平について考えを深めることができるように構成されています。このように日本文教出版は、様々な見方によって、多面的に考えることができる教材を用意し、“学習の進め方”のページを活用することで、生徒が価値について考え議論する場面を仕組んでいます。さらに「自分に+1」という問いによって、視点を明らかにして自分を見つめることができる構成になっていると言えます。この問いによって、道徳的価値について、多面的・多角的に捉え、改めて自分との関わりで生き方を深く見つめる場が位置付けられています。

以上をもちまして説明を終わらせて頂きます。

【司会者】

ありがとうございました。8者から良質だと思われた2者にしぼって答申をしていただきました。これより質疑の時間となります。委員のみなさま、よろしくお願いします。

【委員】

すべての教科書を見せてもらいました。教科書というのは、文字だけでなく、たくさん絵や写真を使用していることがわかりました。その絵や写真がわかりやすいということでしたが、その絵を見て何を考えさせるのかということ教師はやっていかなければいけないのだと思います。その視点で見たとき、これらの教科書がやりやすいということですか。

【答申者】

資料が視覚的に見てわかりやすいということは道徳だけでなく他教科でも必要なことです。しかし、道徳の資料としての本質は、生徒の心を耕す授業を展開するために、どれだけ生徒の心に迷いや葛藤を生み、生徒が真剣に考えたいという思いになる内容になっているのかということです。表面的なわかりやすさも大事ですが、説明の中でも述べたように教材としての質を大事にして考えております。

【委員】

それでいうと、どちらがその意向にそっているのですか。

【答申者】

キーワードは「多様性」と「気づき」だと思っています。その中で日本文教出版の資料は、生徒自らが深く考えていく中で、あるいは仲間と交流する中で、気づきを促すような展開となっていると考えています。

【司会】

続いて質問はないでしょうか。

【委員】

最近話題のLGBTを扱う資料はあるのかということと、日本文教出版には道徳ノートという付録があり、東京書籍にも話し合いをするときに自分の立場を示す付録がありますが、これについてどのように評価をしていますか。

【答申者】

最初の質問については、今回においてはその視点での協議はしっかりとしておらず、明快な返答ができません。二つ目の質問についても、今回は選ぶ観点を示して協議をしてきたことと、ノートをどのように使うのかは授業者の裁量や判断でありノート通りにやる必要はないというところから、ノートの適合性を十分吟味する協議はしていません。

【司会】

続いて質問はありませんか。

【委員】

教えてもらいたいことがあります。東京書籍は、資料が30話あり、後は付録といった形でいくつか資料が載っています。一方、他者は資料が35話となっています。年間の時間数は35時間ですが、こうした違いについて何か考えがあれば教えてください。

【答申者】

確かに東京書籍は30話の後に付録の資料があります。その資料の中にも読み応えのあるよい資料が含まれていますので、その中から選択したり、目的を明確にして活用したりすることだと捉えています。しかし、今回、研究協議をするにあたって先ほども申しましたとおり、「いじめ」、「郷土」、「考え、議論する」この三つの視点に絞り込んでスタートしていますので、資料の数は論議の中心にしているため、そこについて議論することはありませんでした。

【司会】

もし今のことに関してご意見があればお願いします。

【委員】

私見ですが、例えば一つの資料を2時間扱いにして、さらに膨らまして授業をするなど、何か意図があるのではないかと思い、東京書籍は面白いつくりをしているなど感じました。

【司会】

ありがとうございました。その他いかがでしょうか。

【委員】

1年生はこれだけ、2年生これだけというように学年単独で考えるのではなく、1年生から3年生まで継続して道徳の授業を行うと考えたときは、どちらの教科書がよいですか。

【答申者】

そういった視点で見ると、どちらの教科書もそれぞれによく考えられていると思います。どちらもいじめ

については、大切に網羅された内容になっています。日本文教出版は、いじめの資料をポツ、ポツ、ポツと扱うのではなく連続的に3, 4時間続けて行う考え方をしています。東京書籍でいうと、先ほどご指摘があったように、一つの資料を単位時間だけで扱うのではなくダイナミックに2時間かけて行う計画が設定されています。それぞれによさがあるって、そのよさを積み重ねていけば確かな授業ができると思います。

【司会】

それぞれによさがあるということですが、もし甲乙をつけるとしたらどうなりますか。答申者の考えとしてはいかがでしょうか。

【答申者】

積み重ねるという点については特に甲乙つける部分はないと思いますが、一つ一つの資料の力という部分に視点をあてたときには、説明の中にもあったかと思いますが、日本文教出版には価値の押しつけにならないような工夫がなされていると思います。生徒の気づきや発見を大切にし、いわゆる主人公の生き方に自分を重ねてみて、自分自身が葛藤し、迷いながら考えるようになっていきます。極端な言い方をすれば、正しい価値はこうあるべきですというような資料は極めて少ないと読み取ることができました。

【司会】

ありがとうございます。続いてお願いします。

【委員】

杉原千畝については、東京書籍は2年生、日本文教出版は3年生で扱っています。杉原千畝は社会科でも出てきますが、その資料を2年生で行うことと3年生で行うことを比べられたとき、どちらの方がよいかどのように考えられましたか。

【答申者】

2年生と3年生でどちらが適切かという視点ではなく、どちらの資料が杉原千畝の生き様に心を寄せて感動できるのか、或いは色々な見方、感じ方が交流しやすいか、その視点で比べました。その視点で比べたとき、一方の資料は読み物教材のように長かったです。いわゆる、読んで感動した後、話し合いの時間や交流の時間がどれくらい計算できるのかなという長文でした。もう一方は、わりとすっきりまとめてあり、資料とともに考え議論する時間が十分確保できると判断しました。

【司会】

今の話ですと、どちらの資料がどちらの教科書になりますか。

【答申者】

前者が東京書籍で、後者が日本文教出版になります。東京書籍は、絵や写真がありますが6ページ分あり、日本文教出版は4ページ分でした。

【司会】

それで、日本文教出版の方が議論しやすくなっているということですね。

【答申者】

そうです。東京書籍は読むことに労力を要しすぎることはないのかという感じがしました。でも、それだけ詳しい内容であるというよさもあります。

【司会】

ありがとうございます。その他いかがでしょうか。

【委員】

道徳は数値的な評価はしないということになっていますが、評価するにあたってはどちらの教科書がしやすいですか。

【答申者】

もちろん評価は大事なのですが、評価をするという視点では調査研究をしていませんので、申し訳ありませんがその質問に対する返答は控えさせていただきます。

【委員】

観点を絞り込んで考えたときに日本文教出版の方がということですが、小学校ではすでに東京書籍を採択しています。小中のつなぎということを考えてときに2者の差異があまりないということでしたら、小学校の子どもたちは東京書籍の教科書に慣れているのでそちらの方がよいと思うのですが、そのあたりはどのように考えますか。

【答申者】

回答としては二つあります。

教科書を選ぶときに小学校がどの教科書を選んだのかということはさほど私たちは考えていませんでした。目の前にした8者を純粹に選ぼうというところからスタートしたということが一つです。

もう一つは、小学校が東京書籍を選んだ背景にある観点が、私たちが大切にしたい観点とは違うと思ったことです。それは、小学校は「実行力を重視する」といった観点がありました。いわゆる、道徳で学んだことを生活で具体的に実践するというような実行力的なところを観点に入れていました。それに代わる中学校の観点は「考え、議論する」です。先ほどから何度も言う「多様性」と「気づき」のキーワードで代表されるような道徳の授業をしたいというのが私たちの調査研究で大事にしたところです。観点の違いが、小学校と中学校違いになるということは十分考えられます。

【司会】

ここまで大変白熱した議論であったかと思っております。質問していただいた内容。それから観点として挙げられた「いじめ」、「郷土」、「考え、議論する」。また、「多様性」というキーワードが出ていましたが、それについては教科書展示会のアンケートの中にも、一方的な価値を押しつけるのではなくて多様な見方、考え方を育てられるような教科書を選んでほしいというような意見もございました。そういったことを踏まえて考えたときに、特に観点の3点目において、どちらも優れているのだけれども、より日本文教出版の方が好ましいのではないかと。それから、いじめの問題についても連続して取り上げているところで、どちらかと言えば日本文教出版の方がよいのではないかと。「郷土」に関して、地元の郡上踊りが取り上げられているところから、日本文教出版はより深まりやすいのではないかとという意見がありました。

一方で、資料が30話で構成されていることや2時間続きで計画されている資料がある東京書籍もよい

のではないかと、また、小学校からのつながりを考えると東京書籍がよいのではないかと意見もありました。

こういったことを踏まえて、これからご判断をいただくこととなります。答申者の意見をまとめますと、日本文教出版を採択することが望ましいのではないかとこととなりますが、東京書籍を押し意見もありましたので、挙手をしていただいでよろしいでしょうか。

それでは、答申の方向性を踏まえて日本文教出版の方を採択した方がよいと思われる方は挙手をお願いします。

【司会】

全員の方に挙手をいただきました。その結果、日本文教出版を採択するという決まりました。ありがとうございました。